長崎原爆遺構を歩く

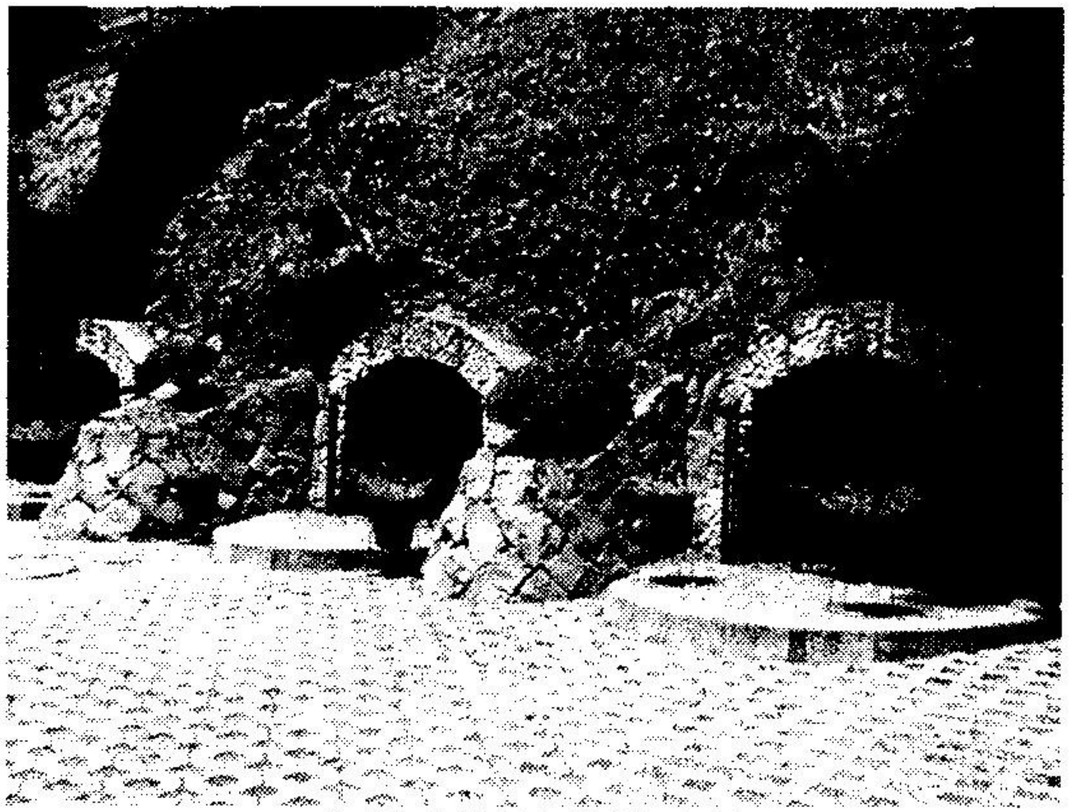
県原水協常任理事　内田　武志

③

焦土の中、建っていた校舎

山里小学校

橋口町20―56



山里小学校の防空壕

山里小学校は爆心地から北約七百㍍の位置にあります。

被爆で、当日学校にいた三十二人の内二十八人の教職員が死亡、在籍児童千五百八十一人の内、約千三百人が死亡したと推定されています。

コの字形の鉄筋コンクリート三階建ての校舎は、一部が崩壊、内部をすべて焼失しましたが爆風に耐え、その姿を残しました。焦土の中に唯一建っていた校舎は山里地区の人々に生きる勇気と希望を与える支えになったそうです。この旧校舎は一九八八年に解体されました。

新校舎は洋館風赤レンガのモダンな建物です。新校舎には平和記念館が設けられており、被爆後の写真や、防空ずきんなども展示されています。

現在、残されている被爆の証しは、旧校舎の階段の手すりと柱、裏門の門柱、防空壕（ごう）などがあります。階段の手すりは平和記念館内に、一対の門柱の片方は、防空壕の横に、もう一方は原爆資料館に保存されています。

正門を入るとすぐ、白御影石の中に、炎の中で天に祈る少女像の銅板レリーフをはめ込んだ碑があります。この碑は、作者名も碑銘もありませんが、隣に、永井隆博士の揮毫（きごう）による「平和」の文字、裏に「あの子らの碑」と彫られた石柱があります。この碑は、永井博士の発案で、生き残った子どもたちの手記を募り出版された『原子雲の下に生きて』の印税をもとに建立されたものです。

（つづく）